日田市埋蔵文化財調査報告書第 113 集

慈眼山遺跡10次

慈眼山遺跡 10 次

日田市埋蔵文化財調査報告書第113集

２０１４年

２０１４年

日田市教育委員会

日田市教育委員会

序　文

この報告書は、平成２４年度に当委員会が、市立桂林小学校の敷地内でのけいりん放課後児童クラブ新築工事に伴って、発掘調査を行った慈眼山遺跡１０次の調査内容をまとめたものです。慈眼山遺跡は１５～１６世紀の屋敷跡を中心とする遺跡で、今回の調査でも同時期の建物跡や溝などが見つかり、過去の調査内容を追認することができました。

こうした発掘調査の成果をまとめた本書が、今後、文化財の保護や桂林地区だけでなく、日田市の中世史の解明、学術研究等にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にご協力を賜りました地元の皆様方、すべての関係者の方々に、心から厚くお礼を申し上げます。

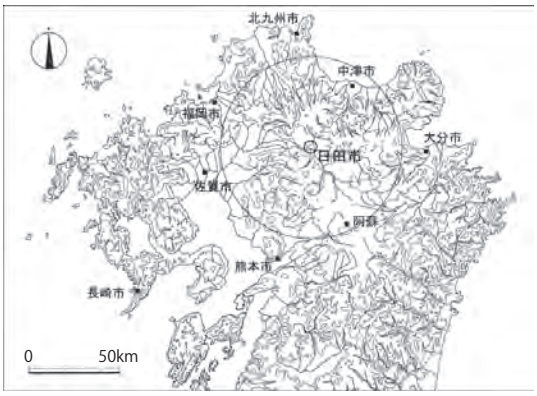
平成２６年３月

日田市教育委員会

教育長　合原　多賀雄

例　　言

1．本書は、日田市教育委員会が平成 24 年度に実施した慈眼山遺跡 10 次の発掘調査報告書である。
2．調査は、平成 24 年度にけいりん放課後児童クラブ新築工事（主管課：日田市役所福祉保健部こども未来室）に伴い、日田市教育委員会が事業主体となり、実施した。
3．調査にあたっては、上城内町自治会長、日田市立桂林小学校、日田市役所福祉保健部こども未来室・土木建築部建築住宅課のご協力を賜った。
4．発掘調査は若杉が担当した。
5．遺構実測及び遺構写真撮影は、若杉が行った。
6．空中写真撮影は、株式会社埋蔵文化財サポートシステム大分支店に委託し、その成果品を使用した。
7．遺物実測・写真撮影は、雅企画有限会社に委託し、その成果品を使用した。
8．遺物実測図及び遺構図の製図は、若杉が行ったほか、高田美保・武石和美（文化財保護課整理作業員）の協力を得た。
9．遺物実測・製図については、雅企画有限会社に委託し、その成果品を使用した。
10．調査において出土した柱木の樹種同定については、株式会社パレオ・ラボに委託し、その成果をⅣに掲載した。
11．挿図中の方位、文中の方位角は磁北を示す。
12．写真図版の遺物に付した番号は、実測図番号に対応する。
13．出土遺物および図面、写真類は、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
14．本書の執筆は、Ⅳ以外を若杉が行い、全体の編集は若杉が行った。



日田市の位置

本　文　目　次

Ⅰ　調査の経過……1
（１）調査に至る経緯 ……1
（２）発掘作業の経過 ……2
（３）整理等作業の経過 ……2
Ⅱ　遺跡の位置と環境……3
Ⅲ　調査の成果……4
（１）調査の方法と概要 ……4
（２）遺構と遺物 ……4
Ⅳ　慈眼山遺跡１０次調査出土木材の樹種同定……9
Ⅴ　総括……１２

挿　図　目　次

第１図　調査区位置図（1/5,000）……2
第２図　周辺遺跡分布図（1/20,000）……3
第３図　調査地周辺地形測量図（1/2,500）……4
第４図　遺構配置図（1/150）及び基本土層実測図（1/30）……5
第５図　掘立柱建物跡実測図（1/80）……6
第６図　溝状遺構実測図（1/80）……6
第７図　土坑実測図（1/40）……7
第８図　掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑出土遺物実測図（1/4）……7
第９図　ピット実測図（1/30）……8
第10図　ピット・その他の出土遺物実測図（３）（1/4・1/2）……8

本文写真目次

写真１　作業風景……1
写真２　調査に従事されたみなさん……2
写真３　基本土層……5
写真４　慈眼山遺跡出土柱材の光学顕微鏡写真……11

表　目　次

第１表　慈眼山遺跡出土柱材の樹種同定結果……9
第２表　出土遺物観察表……12

写真図版目次

写真図版１　① 調査区全体写真（南西から）
② 掘立柱建物跡発掘状況（南西から）
③ 掘立柱建物跡Ｐ２発掘状況（南から）
④ 掘立柱建物跡Ｐ３発掘状況（北から）
⑤ １号溝状遺構発掘状況（西から）
⑥ ２号溝状遺構発掘状況（北西から）
⑦ １号土坑発掘状況（北から）
⑧ ３号土坑完掘状況（北から）
写真図版２　① ４号土坑完掘状況（西から）
② ４号土坑遺物出土状況（西から）
③Ｐ６遺物出土状況（北から）
④Ｐ１３遺物出土状況（北から）
⑤Ｐ１４遺物出土状況（北から）
⑥Ｐ５６遺物出土状況（北から）
⑦Ｐ５６出土遺物集合写真
写真図版３　出土遺物

Ⅰ　調査の経過

（1）調査に至る経緯

本調査の原因となった「けいりん放課後児童クラブ新築工事」は、市内上城内町に所在する桂林小学校校舎を使用していた同クラブを小学校の敷地内に新たに建設するものである（主管課：こども未来室）。

事業の対象地は慈眼山遺跡に該当し、これまで同じ学校の敷地内での公民館建設や学校周辺で宅地造成に伴う発掘調査を数回にわたり実施していたことから、遺跡の存在する可能性は高いと容易に予想できた。まず、建物の建築期間を確認したところ、が同年 11 月上旬から予定されていたことから、こども未来室の担当者も加わって三者で協議を行い、早急に予備調査を実施することとなった。

予備調査を平成 24 年 8 月 30 日に実施した結果、現地表面より約２m下で遺構の存在が確認された。調査地一帯は地下水による軟弱地盤であることから、この建物の工事では、径 250 ㎜の鋼管杭 40 本を６mの深さまで打ち込む地盤改良が採用されることとなっていたため、遺構面を損なわない方向で工法変更ができないかとの協議を行った。しかし、当初の工法を変更することは軟弱地盤のため難しいことから、発掘調査が必要と判断した。

そこで、平成 24 年９月３日付けで、発掘調査が必要との判断を所見とし、大分県教育委員会教育長あてに文化財保護法第 94 条の通知を進達し、同年９月６日に同教育長より、遺跡の取扱いについて、発掘調査を実施する旨の通知が出された。これに基づき、こども未来室との調整を行い、平成 24 年９月 25 日に発掘調査に着手した。

なお、調査関係者は以下の通りで、職名・氏名は当時のままとしている。

平成２４年度（２０１２）／発掘調査
調 査 主 体　日田市教育委員会
調査責任者　合原多賀雄（日田市教育委員会教育長）
調 査 統 括　財津俊一（日田市教育庁文化財保護課長）
調 査 事 務　土居和幸（同課埋蔵文化財係長）井上和泉　若杉竜太（以上、同課主査）
調 査 担 当　若杉竜太（同課主査）
発掘作業員　加藤寿子　河津定雄　五反田静子　津村小夜子

平成２５年（２０１３）／整理等作業、報告書作成・印刷
調 査 主 体　日田市教育委員会
調査責任者　合原多賀雄（日田市教育委員会教育長）
調 査 統 括　財津俊一（日田市教育庁文化財保護課長）
調 査 事 務　園田恭一郎（同課埋蔵文化財係長）
　　武内貴彦（同課専門員）若杉竜太（同課主査）
整理・報告書担当　若杉竜太（同課主査）
整理作業員　伊藤一美　黒木千鶴子　武石和美　安元 百合

写真１　作業風景

（2）発掘作業の経過

発掘調査は、平成 24 年 9 月 25 日より着手した。以下、その経過を調査日誌に基づき略述する。

平成 24 年 9 月 25 日　アスファルトカット後、機械による表土除去を開始。
安全対策のため、調査区の周囲にゲート付きの仮囲いを設置。

平成 24 年 9 月 26 日　表土除去が完了後、作業員による遺構検出を開始。

平成 24 年 10 月 1 日　遺構の掘り下げを開始。

平成 24 年 10 月 2 日　個別遺構実測を開始。

平成 24 年 10 月 10 日　平面図（1/20）用の割付を行う。

平成 24 年 10 月 15 日　空中写真撮影を実施。

平成 24 年 10 月 18 日　遺構掘り下げ終了。

平成 24 年 10 月 19 日　遺構実測終了し、発掘作業完了。

平成 24 年 10 月 22 日　調査区の埋め戻しを開始。

平成 24 年 10 月 25 日　調査区の埋め戻しを終了。

平成 24 年 10 月 26 日　器材撤収し、全ての作業を終了

この間、桂林小学校の児童が数回、現場見学に訪れる。

その後、同年 10 月 30 日付けで大分県教育委員会教育長あてに終了報告、日田警察署長あてに埋蔵文化財発見届を提出し、翌平成 25 年 2 月 18 日付けで埋蔵物の文化財認定通知を受けた。

（3）整理等作業の経過

整理等の作業は、平成 25 年 4 月 1 日より実施した。出土した遺物のうち、土師質土器については、接合資料が多く、やや時間を要した。接合終了後は、必要に応じて、石膏による補強を行い、6 月 13 日にすべての作業を終了した。その後、9 月 2 日から 10 月 31 日までの期間で出土遺物の実測及び写真撮影業務を、また、9 月 25 日から 12 月 20 日の期間で出土柱材の自然科学分析業務（樹種同定）の委託を実施した。

写真２　調査に従事されたみなさん

第１図　調査区位置図（1/5,000）

Ⅱ　遺跡の位置と環境

慈眼山遺跡は盆地東部の北側に慈眼山、東側に佐寺原台地を望む、沖積地上に位置する。この一帯は官公庁や学校などが集中する地域であり、宅地造成を中心にこれまでに 11 次にわたる調査が行われている。

遺跡の北東側に位置する１～３次調査では、古代・中世の遺構が検出されている。古代においては、建物は確認されていないものの、井桁組の井戸が発見されたことから、周辺に居住地の存在が想定されると同時に、「林」・「門」の墨書土器の存在から公的施設や有力者がいたことが推測され、古代日田の有力氏族である日下部氏との関係性が指摘されている。中世の遺構については、遺跡の南側を中心に実施された４～９、11 次調査において、14 世紀から 16 世紀の遺構や遺物が確認されている(1)。これらの遺構は、大規模な土地造成を窺わせる整地層に掘り込まれており、大蔵姓日田氏から大友姓日田氏が支配した時期の城下町の様子を窺うことができる。さらに遺跡の北側から東側にかけては、日田氏の居城であった大蔵古城が広がる。

次に慈眼山遺跡周辺の遺跡を見てみると、南側の大波羅丘陵の東側の沖積地に大波羅遺跡がある。この遺跡では５次にわたる調査が行われ、大型の柱木を用いた柱穴列や「山」「田」などの墨書土器が見つかっており、古代、特に奈良時代の官衙的施設の存在が想定されている。また、大波羅遺跡の北東側には、大友姓日田氏滅亡後、日田を治めた八郡老の一人、堤氏の居城であった堤城跡がある。

そのほか、遺跡東側の丘陵中腹には古墳時代中期の円墳と考えられている丸山古墳、また台地上には弥生時代中期～終末期にかけての集落が確認された佐寺原遺跡がある。特に終末期の竪穴建物跡からが炭化したアズキやイネ・アワ・キビなどが出土し、当時の食生活や周辺環境を知る上で貴重な成果が上がっている。また大波羅遺跡の東側の丘陵上には弥生から古墳時代にかけての溝や流路などが確認された赤迫遺跡がる。

次に遺跡の東側に目を移すと、豆田町を中心とした城下町遺跡が広がり、花月川を挟んだ北側には江戸時代に代官・郡代が置かれた永山布政所跡、その背後の独立丘陵は永山城跡・月隈横穴墓群が存在する。一方、城下町遺跡の西側では、古墳時代中期の鉄テイが出土した一丁田遺跡、南側には江戸時代の私塾跡である史跡咸宜園跡、古代の遺構が確認された日田条里四反畑地区や弥生時代・古墳時代の竪穴建物跡や溝が発見された日田条里飛矢地区など存在する。こうした状況をみると慈眼山遺跡及びその周辺は古代以降、中近世を通して日田における中心地域の一つであったといえる。

註 (1) 平成 25 年度に調査実施。

参考文献
坂本嘉弘『慈眼山遺跡』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第 55 集　大分県教育委員会　2011
及び日田市教育委員会発行の慈眼山遺跡関係報告書

1　慈眼山遺跡
2　大蔵古城跡
3　丸山古墳
4　大波羅遺跡
5　堤城跡
6　佐寺原遺跡
7　赤迫遺跡
8　永山城跡・月隈横穴群
9　永山布政所跡
10　城下町遺跡
11　一丁田遺跡
12　史跡咸宜園跡
13　日田条里四反畑地区
14　日田条里飛矢地区

第２図 周辺遺跡分布図（1/20,000）

Ⅲ　調査の成果

（1）調査の方法と概要（第４図）

調査は、機械により対象地のアスファルトを除去した後、遺構検出面まで掘り下げを行い、その後は人力による遺構検出を行なった。なお、発生した土砂については、ダンプトラックでの搬出を行った。土層の堆積状況については、次のとおりである。１層はアルファルトの下に砕石と灰土（灰茶褐色粘質土）がみられるが、これは小学校建設時の造成土である。２層は旧水田層で３層は旧水田層の基盤土となる。

４～６層は水田造成時の盛土と考えられ、中世の遺物を含んでいる。次に７層の上面が遺構検出面となり、現地表面より約 1.5 m下がる。この７層から 10 層までは黄灰色の粘質土層であり、しまり具合や炭を含む量で分層しているが、１つの整地層として捉えられる。11 層は黄灰褐色砂質土の地山である。

遺構の検出状況については、本遺跡における過去の調査に比べ、やや低い密度であった。確認された遺構としては、掘立柱建物跡１棟、溝状遺構２条、土坑４基、ピットが約 70 個である。

この他、Ｐ 36・、61、64、65、68 ～ 70 から比較的大型の柱材や木片が出土しており、建物が存在していたと考えられるが、柱穴の展開を確認することができなかった。（このうち、Ｐ 61、68 ～ 70 を分析、Ⅳ参照）

なお、遺物についての記述は、第２表を参照されたい。

（2）遺構と遺物

１．掘立柱建物跡（第５・８図　図版１）

この竪穴建物跡は調査区の南側で確認され、１号溝状遺構を切る。主軸方向はＮ－ 10°－Ｅに取り、柱間は２間×１間＋αで、南側は調査区外へ広がるとみられ、南北方向が桁行になると考えられる。規模は柱穴間の心々距離で桁行約 2.4 m＋α、梁行約 3.1 m、検出面からの深さは約 20 ～ 60 ㎝を測る。確認された柱穴のうち、Ｐ２より柱木が出土した。長さは約 45 ㎝、最も太い部分で幅約 16 ㎝を測る。（Ⅳに分析結果を掲載）。

遺物は、全ての柱穴から土師質土器坏などが出土している。

２．溝状遺構（第６・８図　図版１）

１号溝状遺構

この溝状遺構は、調査区の南側で確認され、掘立柱建物跡に切られる。東側は三ツ又に分かれていたことから、便宜上南からＡ・Ｂ・Ｃとした。これらの３本の溝は、合流して東から西へと流れている。

主軸は、１号Ａ溝状遺構でＮ－ 92°－Ｗにとり、調査区内での長さは約 5.2 m､幅は 0.4 ～ 0.7 mを測る。Ｂ・Ｃはそれぞれ、東端から約 4.1 m、約 2.1 mの位置でＡと合流する。断面形は舟底状もしくは逆台形を呈し、深さは約 10 ㎝を測る。

遺物は、土師質土器小皿・坏が出土している。

２号溝状遺構

この溝状遺構は、調査区東側で確認され、北端をピ

第３図　調査地周辺地形測量図（1/2,500）

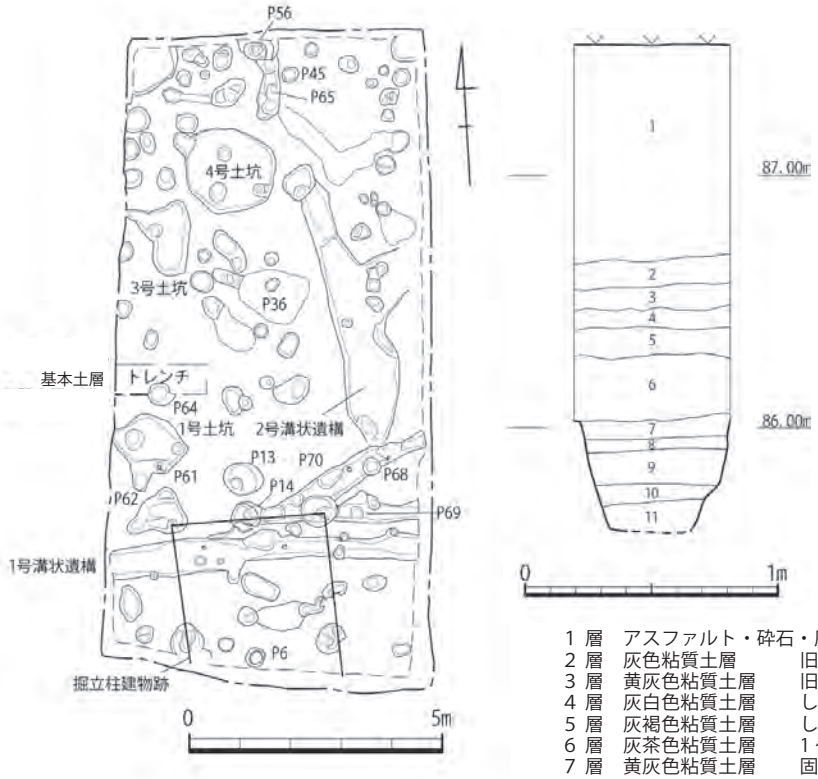


写真３　基本土層（2 層以下）

1 層　アスファルト・砕石・灰土（学校建設時）の盛土
2 層　灰色粘質土層　　旧水田層
3 層　黄灰色粘質土層　　旧水田層基盤土
4 層　灰白色粘質土層　　しまりなし
5 層　灰褐色粘質土層　　しまりあり、鉄分・遺物含む
6 層　灰茶色粘質土層　　1 ～ 2 ㎝の炭・遺物を含む
7 層　黄灰色粘質土層　　固くしまる
8 層　黄灰色粘質土層　　炭を含む
9 層　黄灰色粘質土層　　７層よりしまる
10 層　黄灰色粘質土層　　炭含む
11 層　黄灰褐色砂質土層　地山

第４図　遺構配置図（1/150）及び基本土層図（1/30）

ット、南端を１号溝状遺構に切られる。主軸は、N－ 17°－ W にとり、中央付近で東側に枝分かれする部分はN－ 72°－ E にとる。長さは南北方向が約 5.2 m、幅は約 0.5 ～ 1.0 mを測る。断面形は逆台形状を呈し、深さは約 10 ～ 20 ㎝を測る。また、東西方向は長さ約 1.0 m、幅約 0.9 mを測る。

遺物は、土師質の擂鉢が出土している。

３．土坑

土坑は３基確認され、そのうち、４号土坑から多くの遺物が出土した。なお、当初２号土坑として掘り下げを行なっていたものがあったが、掘り下げの過程で遺構ではないと判断したことから、欠番としている。

１号土坑（第７・８図　図版１）

この土坑は、調査区南西側で確認された。土坑の西側は、若干調査区外へ広がり、Ｐ 61・Ｐ 62 など数個のピットと切り合う。平面形は丸味を帯びた不定形で、床面はほぼ平坦である。壁の立ち上がりは、緩やかである。規模は、長軸約 2.9 m、短軸約 2.1 m、深さは約 20 ㎝を測る。

遺物は、土師質土器坏が出土している。

３号土坑（第７図　図版１）

この土坑は、調査区北西側で確認され、１個のピットと切り合う付近が削平を受けている。平面形は、楕円形を呈し、床面はほぼ平坦である。壁の立ち上がりは緩やかである。規模は、長軸約 3.0 m、短軸約 1.4 m、深さは約 35 ㎝を測る。

遺物は、土師質土器の坏・小皿の小片が出土しているが、図化可能なものはなかった。

４号土坑（第７・８図　図版２）

この土坑は、３号土坑の北東側で確認された。平面形は、ほぼ円形でピットと切り合う北西側が削平を受けている。床面は、南西方向から北東方向に向かってやや傾斜する。規模は、南北軸約 3.3 m、東西軸約 3.5 m、深さは

約 20 ㎝を測る。

遺物は、土師質土器坏が中央付近及び北側の床面直上から 10 ㎝ほど浮いた状態で、比較的まとまった数が出土している。

４．ピット（第９・10 図　図版２）

ピットは、調査区全体にわたって約 80 個検出されているが、その内遺物が出土したものが 71 個で、前述のように掘立柱建物の柱穴になるものやその可能性を伺わせるものがある。ここでは、遺物が出土したピットの内、多数出たものやその出土状況が特徴的なものについて、述べる。

Ｐ６

このピットは、調査区の南側で確認された。平面形はほぼ円形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。規模は、直径約 76 ㎝、深さ約 86 ㎝である。

内部には底面から約 42 ㎝の高さまで上面が平坦にあるように石が置かれており、さらにその上約 20 ㎝の付近で、土師質土器坏が２点出土している。

Ｐ１３

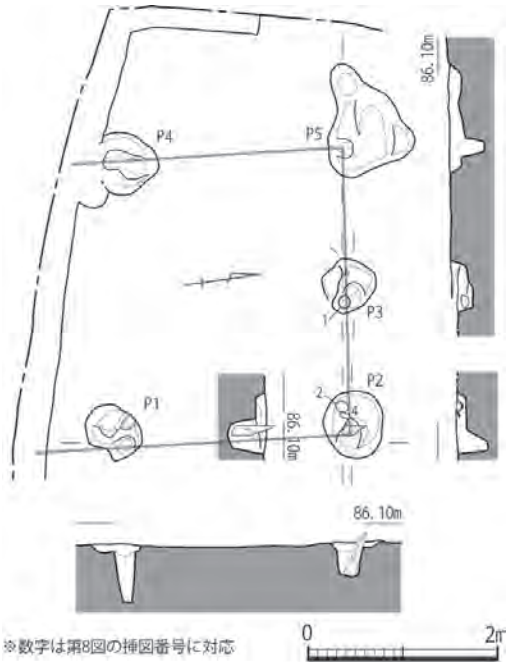
このピットは、調査区の中央付近よりやや南側、掘立柱建物跡の北側で確認され、南西側を他のピットに切られている。平面形は楕円形を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。規模は、長軸約 160 ㎝、短軸約 129 ㎝、深さは約 35 ㎝である。なお、切られているピットの深さは約 120 ㎝である。

遺物は、南側の床面直上より、ほぼ直立した状態で土師質土器坏が１点出土している。

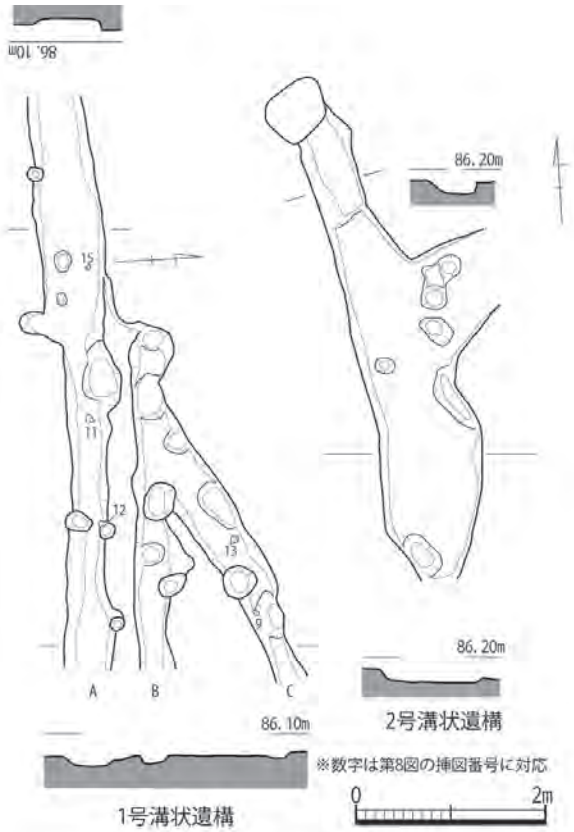
Ｐ１４

このピットは、Ｐ１３の南側で確認され、掘立柱建物跡に切られ、南西側が削平を受けている。平面形は、やや歪な円形を呈し、壁は急傾斜で立ち上がる。床面は、中央付近がやや高まりを持つ。規模は、東西軸約 103 ㎝、南北軸約 81 ㎝＋α、床面までの深さは、最も深い部分で約 30 ㎝を測る。

遺物は、床面より５～15 ㎝浮いた状態で２個体分が出土した。



第５図　掘立柱建物跡実測図（1/80）

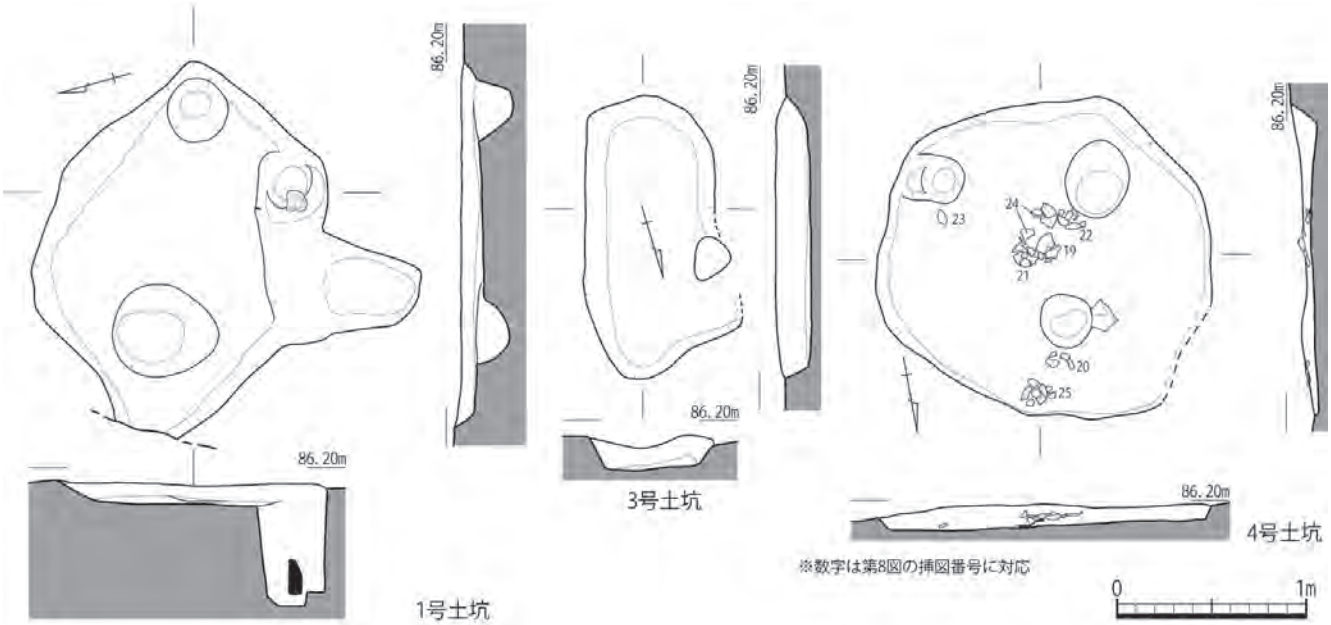


第６図　溝状遺構実測図（1/80）

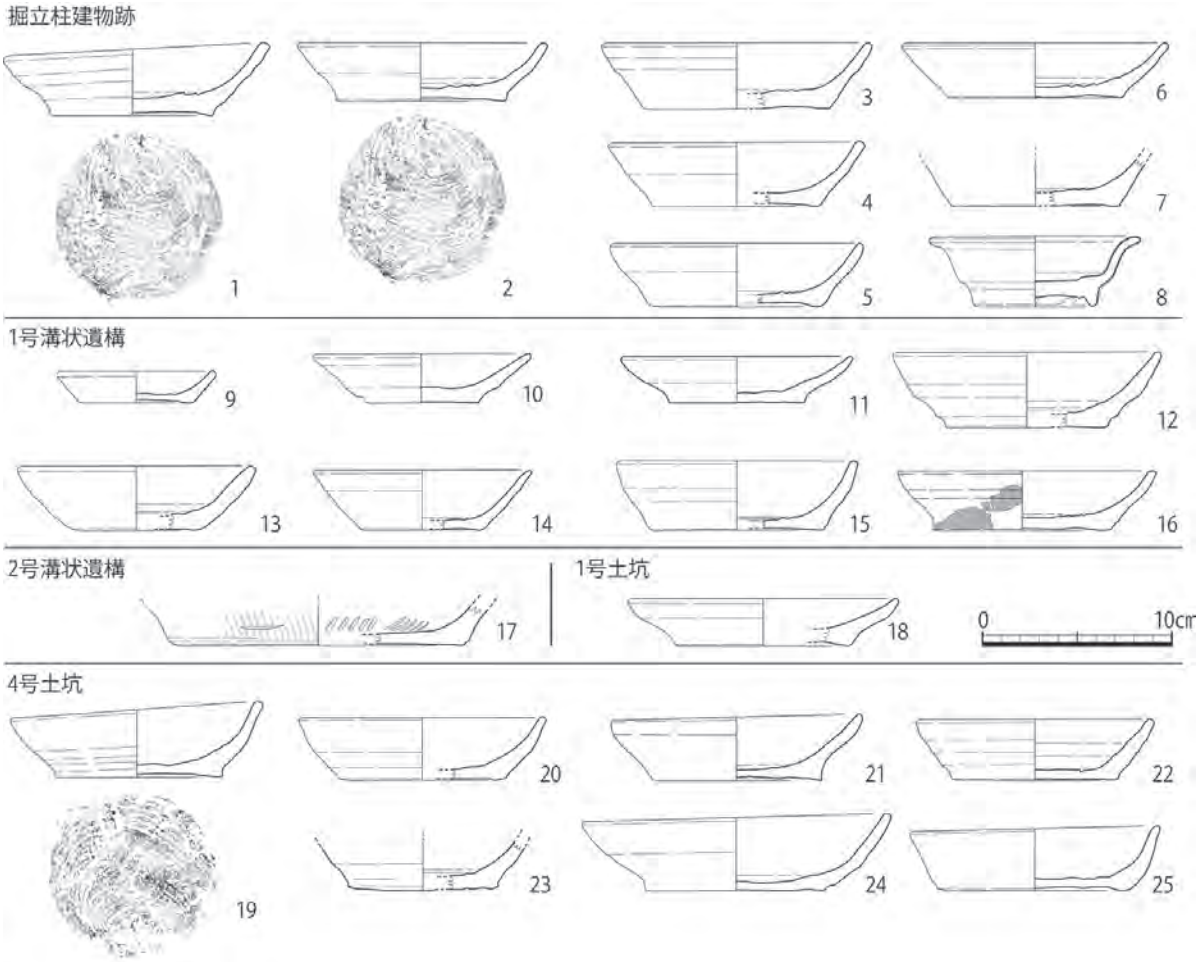
Ｐ５６

このピットは、調査区の北端で確認された。北側は、排水対策で溝を掘ったことで削ってしまっているが、若干調査区外へ広がると考えられる。平面形は、円形を呈すると思われ、上端・下端ともに２段掘りになっている。規模は東西軸約 157 ㎝、深さは最も深い部分で約 129 ㎝である。

遺物は、底面より 40 ～ 60 ㎝浮いた位置で、多数確認されている。図示したのは 11 点であるが、破片資料も含めれば、それ以上の点数になりそうである。



第７図　土坑実測図（1/40）

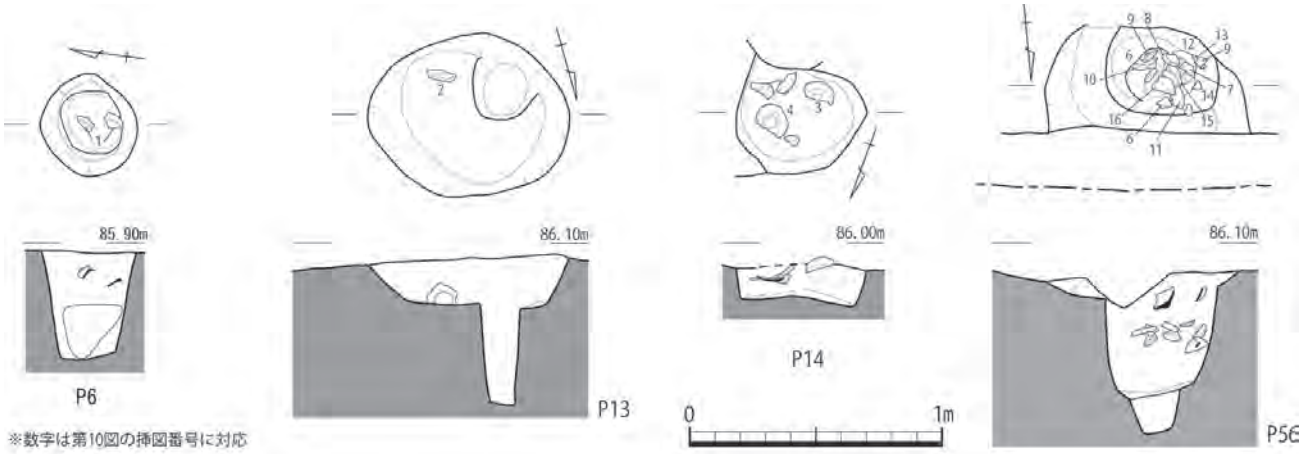


第８図　掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑出土遺物実測図（1/4）

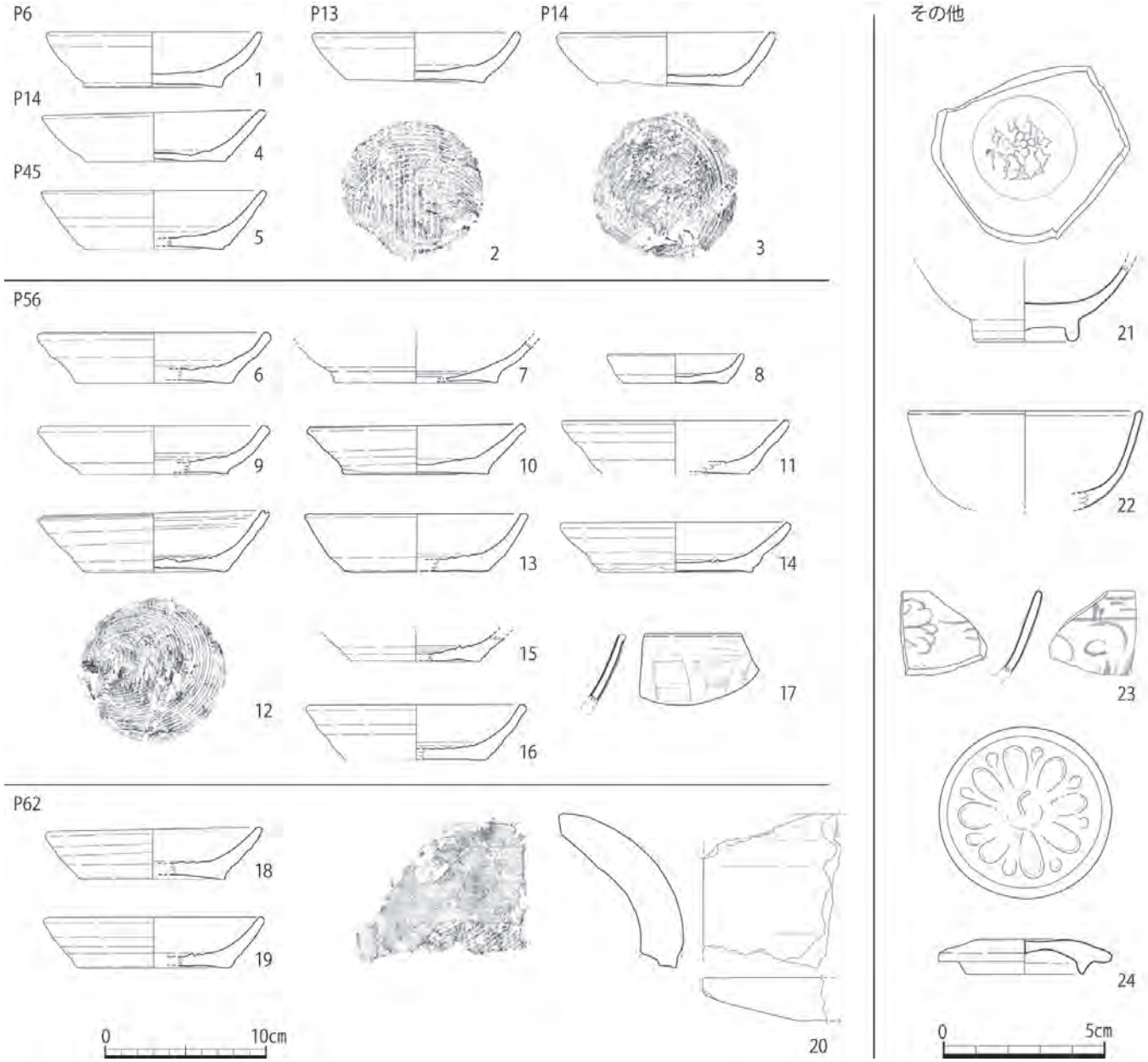
また、遺構実測図は掲載していないが、１号土坑と切り合っているＰ６２からは土師質土器坏のほかに、軒丸瓦が出土している。

５．その他の遺物（第 14 図　図版２）

ここでは、整地層中や遺構検出中に出土したものなど、遺構に伴わずに出土したものを掲載している。



第 9 図　ピット実測図（1/30）



第 10 図　ピット・その他の出土遺物実測図（1 ～ 23：1/4,24:1/2）

Ⅳ　慈眼山遺跡 10 次調査出土木材の樹種同定

黒沼保子・佐々木由香（パレオ・ラボ）

１．はじめに

日田市の大波羅丘陵西側に位置する慈眼山遺跡から出土した柱材 5 点について、樹種同定を行った。

２．試料と方法

試料は、建物柱穴 P3 から出土した柱材 1 点（No.1）と、P61、P68、P69、P70 から出土した柱材各 1 点（No.2 ～ 5）の、計 5 点である。時期は、考古学的な所見から 15 世紀後半～ 16 世紀前半と考えられている。

木取りと加工痕を観察した後、これらの試料から、剃刀を用いて 3 断面（横断面・接線断面・放射断面）の切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これらを光学顕微鏡で観察・同定し、写真撮影を行った。プレパラートは、（株）パレオ・ラボに保管されている。

３．結果

樹種同定の結果、針葉樹ではマツ属複維管束亜属とカヤの 2 分類群、広葉樹ではクリとツバキ属、サクラ属の 3 分類群の、合計 5 分類群が確認された（第 1 表）。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を図版に示す。

（1）マツ属複維管束亜属　*Pinus* subgen. *Diploxylon*　マツ科　写真 4　1a-1c（No.4）

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射組織、放射仮道管からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部は広い。大型の樹脂道を薄壁のエピセリウム細胞が囲んでいる。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の水平壁は内側向きに鋸歯状に肥厚する。

マツ属複維管束亜属は暖帯から温帯下部に分布する常緑高木で、アカマツとクロマツがある。材は針葉樹では重硬な部類で、靭性は大である。

（2）カヤ　*Torreya nucifera* (L.) Siebold et Zucc.　イチイ科　写真 4　2a-2c（No.1）

仮道管と放射組織からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。仮道管の内壁に 2 ～ 3 本対のらせん肥厚がある。分野壁孔はヒノキ～トウヒ型で、1 分野に 1 ～ 3 個程度存在する。

カヤは宮城県以南の温帯から暖帯に分布する常緑高木である。材はやや重硬および緻密である。また弾力に富み、耐久力が強く水湿にも強い。

（3）クリ　*Castanea crenata* Siebold et Zucc.　ブナ科　写真 4　3a-3c（No.2）

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で主に単列である。

クリは温帯下部から暖帯に分布する落葉高木である。材は重硬で、耐朽性および耐湿性に優れ、保存性が高い。

第 1 表　慈眼山遺跡出土柱材の樹種同定結果

No.	遺構番号	木製品番号	器種	樹種	木取り	所　　見
1	建物柱穴 P3	柱木 1	柱材	カヤ	芯持丸木	切断痕、側面に刃物痕多数
2	P61	柱木 2	柱材	クリ	芯持丸木	端部に伐採痕
3	P68	柱木 3	柱材	サクラ属	芯持丸木	現状は割れ
4	P69	柱木 4	柱材	マツ属複維管束亜属	不明	劣化
5	P70	柱木 5	柱材	ツバキ属	芯持丸木	端部伐採痕

（4）ツバキ属　*Camellia*　ツバキ科　写真４　4a-4c（No.5）

ごく小径の孤立道管が、晩材に向けてやや径を減じながら密に散在する散孔材である。道管の穿孔は 10 段程度の横棒からなる階段状である。放射組織は方形もしくは直立細胞が上下に２～４細胞連なる異性で、１～３列幅程度、多列部が単列部と同じ大きさである。大型の結晶細胞が単列部に認められる。

ツバキ属は温帯から暖帯に生育する常緑高木もしくは低木である。ヤブツバキやサザンカ、チャノキなどがある。材は重硬および緻密で、切削加工および割裂は困難であるが、強靱で耐朽性は大きい。

（5）サクラ属（広義）　*Prunus* s.l.　バラ科　写真４　5a-5c（No.3）

やや小型の道管が、単独あるいは斜め方向に２～３個複合する散孔材である。道管内には所々に赤褐色の傷害樹脂道がみられる。道管の穿孔は単一で、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、１～５列幅である。

サクラ属は温帯に生育する落葉または常緑の高木または低木である。サクラ属はさらにサクラ亜属やスモモ亜属、モモ亜属、ウワズミザクラ亜属などに分類され、25 種がある。木材組織からはモモとバクチノキ以外は識別困難なため、この２種を除いたサクラ属とする。材は比較的重硬で緻密だが、加工は容易である。

４．考察

15 世紀後半～ 16 世紀前半の柱材は、５本とも異なる樹種であった。針葉樹ではマツ属複維管束亜属とカヤが確認された。マツ属複維管束亜属は強靱、カヤはやや重硬だが弾力に富んでおり、いずれも水湿に強い特性を持つ。広葉樹ではクリとツバキ属、サクラ属が確認された。クリとツバキ属は重硬で、サクラ属も比較的重硬な部類に属する。いずれも粘りがあり、保存性が高い材である。慈眼山遺跡の柱材は、樹種に統一性はみられなかったが、比較的重硬で保存性や耐水性のある木材を選択して利用したと考えられる。

九州地方では、弥生時代後期～古墳時代初頭の建築材には、広葉樹のシイ属とクリを中心に広葉樹が多く利用されており、針葉樹ではスギやマツ属、モミ属などの利用が確認されている（山口，2012）。大分県では、竹田市の小園遺跡で弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居から出土した建築部材の樹種同定が行われており、カヤやクリ、サクラ属を含む多数の樹種が確認されている（伊東・山田編，2012）。九州地方では中世以降の建築材は樹種同定例が少ないため、木材の利用傾向が明確ではない。しかし、九州の戦国時代～江戸時代初期における木製品全体の傾向は、スギやヒノキ、マツ属を主とする針葉樹と、クリとシイ属を中心に多用な広葉樹が利用されている（山口，2012）。日田市では、大波羅遺跡から出土した古代の柱材でカヤが確認されている（日田市，2011）。また、慈眼山遺跡第８次調査で出土した 16 世紀前半の柱材１点がマツ属複維管束亜属であった（佐々木，2012）。分析試料が少ないため一概に比較できないが、多用な樹種を利用する木材の利用傾向は、今回の分析結果と類似しており、日田市における古代～中世の木材利用傾向とも整合的であった。

引用文献

伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学－出土木製品用材データベース－．449p，海青社.

日田市教育庁文化財保護課編（2011）大波羅遺跡－第５次調査の概要－．25p，日田市教育委員会.

佐々木由香（2012）慈眼山遺跡出土木材の樹種同定．日田市教育庁文化財保護課編「慈眼山遺跡８次」：19-20p，日田市教育委員会.

山口譲治（2012）九州・沖縄（1）－古代以前－．伊東隆夫・山田昌久編「木の考古学－出土木製品用材データベース－」：300-311p，海青社.

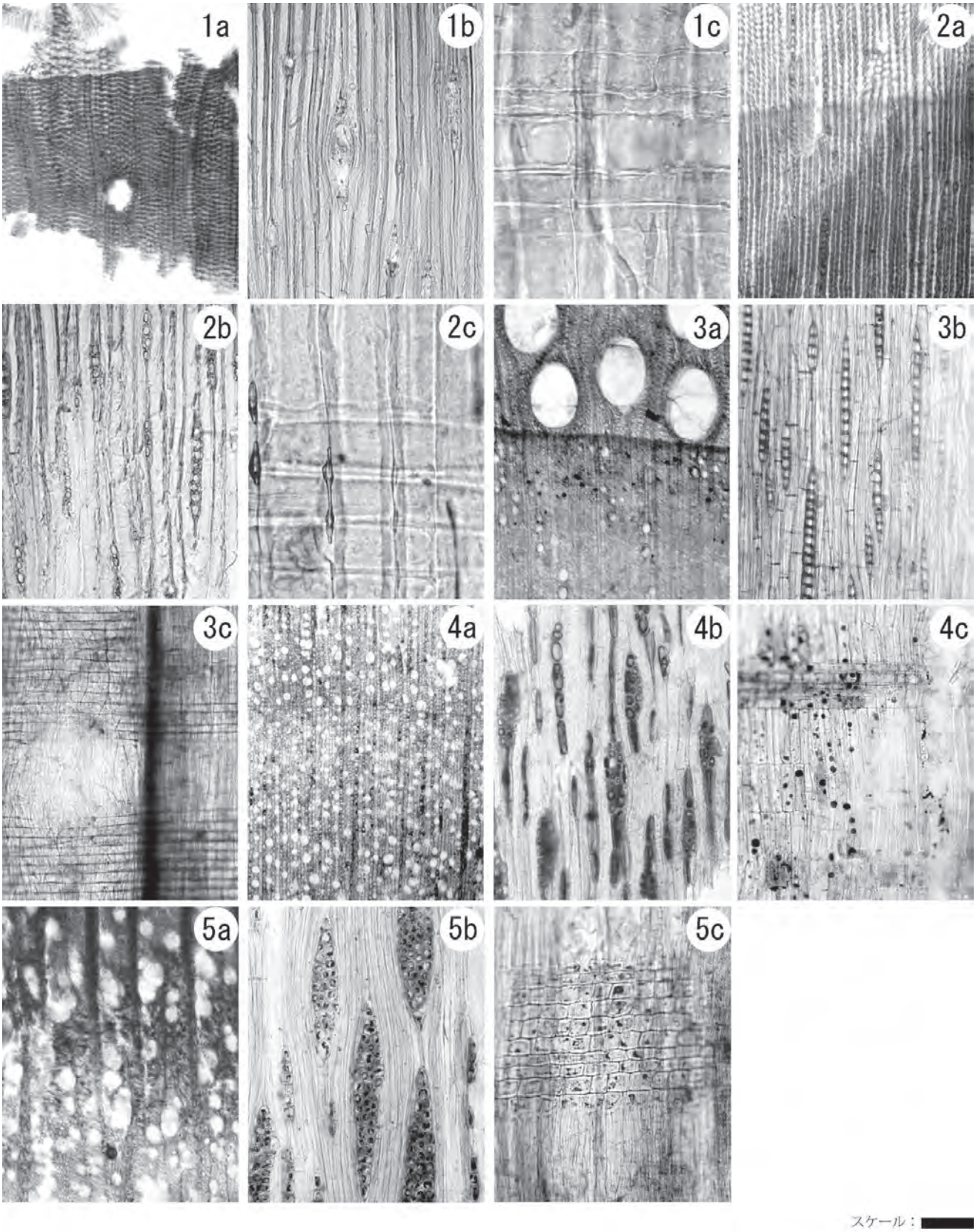


写真４　慈眼山遺跡 10 次調査出土木材の光学顕微鏡写真

1a-1c. マツ属複維管束亜属（No.4）、2a-2c. カヤ（No.1）、3a-3c. クリ（No.2）、4a-4c. ツバキ属（No.5）、5a-5c. サクラ属（No.3）
a: 横断面（スケール =250 μ m）、b: 接線断面（スケール =100 μ m）、c: 放射断面（スケール =1c-2c：25 μ m、3c-5c：100 μ m）

Ⅴ　総括

前章までに報告してきたように、本調査では整地層に掘り込まれた掘立柱建物跡や溝状遺構、土坑、ピットなどが多数確認された。これらの遺構の時期については、出土遺物から 15 世紀後半から 16 世紀前半を中心としており、これまでの調査の内容を追認するとともに、集落の広がりを想定することができた。今後、調査事例を増加することにより、当該期の集落の様相がさらに明らかになってくると考えている。

また、遺物が出土した柱穴やピットについて見てみる。まず、掘立柱建物跡のＰ４の柱穴平面形が南北方向を軸とした楕円形を呈していることから、建物の廃絶時に柱を抜き取った行為が想定される。次にＰ２では、やや北方向に倒れた柱材が出土していることから、柱を抜き取る途中の段階で折れたものと考えられる。掘立柱建物跡の柱穴の他にも、多くの遺物が出土したピット（Ｐ 56）や床面に立った状態で出土したピット（Ｐ 13）など人為的な行為が伺える遺構があり、地鎮のための祭祀行為も想定される。

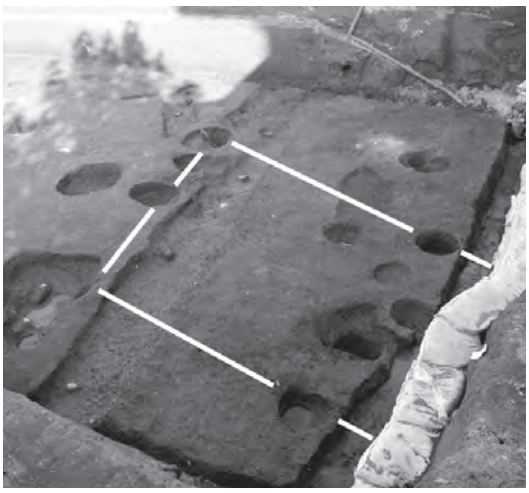
この他、柱材の樹種同定分析により、８次調査で確認されたマツ属(1)以外にもカヤやクリ、サクラ属、マツ属、ツバキ属といった材が確認され、日田市における古代～中世の木材利用傾向と整合することが判明した。

註 (1) 佐々木由香「慈眼山遺跡出土木材の樹種同定」若杉竜太編『慈眼山遺跡８次』日田市埋蔵文化財調査報告書第 103 集　日田市教育委員会　2012

第２表　出土遺物観察表

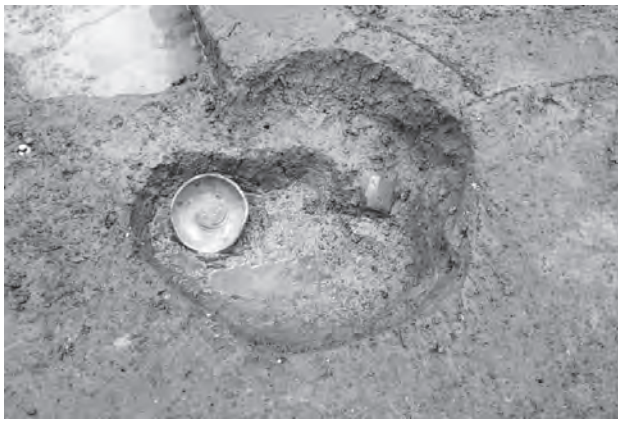
	遺構	写真図版	種別	器種	法量:( )は復元径・残存高			調整			胎土								焼成	色調		備考
挿図番号	出土位置				口径	器高	底径	外面	内面	底面	斜長石	角閃石	石英	雲母	赤色粒	橙色粒	白色粒	黒色粒	砂粒		内面	外面	
第8図1	堀P3	3	土器	杯	13.5	3.5	8.5	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	糸切り痕・板状圧痕	○	○	○	○	○					良好	浅黄橙色	浅黄橙色	
第8図2	堀P2	3	土器	杯	12.7	3.1	9.0	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	糸切り痕・板状圧痕	○				○					良好	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面にスス付着・ゆがみあり
第8図3	堀P4	3	土器	杯	(13.8)	3.5	(9.8)	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	糸切り痕	○	○			○					良好	浅黄色	にぶい黄橙色	
第8図4	堀P2	-	土器	杯	(13.0)	3.4	(8.8)	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	糸切り痕・板状圧痕	○	○			○					良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
第8図5	堀P5	-	土器	杯	(12.9)	3.4	(9.0)	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	糸切り痕・板状圧痕	○	○								良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	口縁部にスス付着
第8図6	堀P4	3	土器	杯	(13.6)	2.9	(9.2)	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	糸切り痕・板状圧痕	○	○			○					良好	にぶい橙色	にぶい橙色	
第8図7	堀P3	-	土器	杯		(2.5)	(9.0)	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	糸切り痕	○	○			○					良好	にぶい橙色	にぶい橙色	
第8図8	堀P4	3		碗	(11.2)	3.7	(6.0)			露胎													
第8図9	1ミゾC	-	土器	杯	(8.1)	1.7	(5.8)	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	糸切り痕・板状圧痕	○	○								良好	明赤褐色	明赤褐色	
第8図10	1ミゾA	3	土器	杯	(11.3)	2.6	6.0	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	糸切り痕	○	○								良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	内外面にスス付着
第8図11	1ミゾA	-	土器	杯	(12.0)	2.5	(7.2)	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	糸切り痕		○		○	○					良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
第8図12	1ミゾA	-	土器	杯	(13.8)	4.0	(8.6)	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り痕	○	○			○					良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	口縁部にスス付着
第8図13	1ミゾC	-	土器	杯	(12.2)	3.4	(7.0)	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	糸切り痕		○			○					良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
第8図14	1ミゾA 1ミゾC	-	土器	杯	(11.4)	3.2	(6.6)	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り痕	○	○			○					良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
第8図15	1ミゾA	-	土器	杯	(12.2)	3.7	(9.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り痕	○	○			○					良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
第8図16	1ミゾA	3	土器	杯	(13.4)	3.2	9.4	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	糸切り痕		○			○					良好	橙色	橙色	外面～底部にスス付着
第8図17	2ミゾ	-	土器	擂鉢		(2.1)	(15.4)	ヨコナデ	すり目・ヨコナデ	ハケ目	○		○		○					良好	にぶい橙色	にぶい橙色	
第8図18	1土	-	土器	杯	(14.2)	2.5	(9.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り痕	○	○			○					良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
第8図19	4土	3	土師	杯	13.1	3.6	8.9	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	糸切り痕・板状圧痕	○				○					良好	橙褐色	橙褐色	
第8図20	4土	3	土器	杯	(12.6)	3.3	(8.8)	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ？(不明瞭)	糸切り痕	○	○								良好	にぶい橙色	にぶい橙色	
第8図21	4土	3	土器	杯	12.9	3.3	9.0	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	糸切り痕	○				○					良好	橙色	橙色	
第8図22	4土	-	土器	杯	(12.0)	3.3	(8.8)	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	糸切り痕・板状圧痕		○			○					良好	橙色	橙色	
第8図23	4土	3	土器	杯		(2.6)	(8.0)	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	糸切り痕	○	○			○					良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
第8図24	4土	3	土器	杯	15.9	3.9	9.5	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	糸切り痕	○	○								良好	明黄褐色	にぶい黄橙色	外面にスス付着
第8図25	4土	3	土器	杯	12.9	3.3	10.2	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り痕・板状圧痕	○	○			○					良好	にぶい橙色	にぶい橙色	
第10図1	P6	3	土器	杯	(13.0)	3.4	8.6	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	糸切り痕・板状圧痕		○			○					良好	にぶい橙色	にぶい橙色	
第10図2	P13	3	土師	杯	(12.6)	3.0	8.6	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	糸切り痕・板状圧痕	○									良好	浅黄色	浅黄色	
第10図3	P14	3	土師	杯	13.0	3.4	9.0	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	糸切り痕	○	○								良好	灰白色	灰白色	内外側にスス付着
第10図4	P14	3	土師	杯	13.6	3.1	8.7	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	糸切り痕・板状圧痕	○				○					良好	灰白色	灰白色	
第10図5	P45	3	土器	杯	(13.6)	3.7	8.6	ヨコナデ	ヨコナデ・スス付着・合成	糸切り痕	○	○								良好	灰白色	浅黄橙色	内面に一部スス付着
第10図6	P56	-	土器	杯	(13.8)	3.2	(9.6)	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り痕		○			○					良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
第10図7	P56	-	土器	杯		(2.6)	(10.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り痕	○	○			○					良好	灰黄褐色	灰黄褐色	
第10図8	P56	-	土器	皿	(8.2)	1.8	(6.6)	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	糸切り痕		○								良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
第10図9	P56	-	土器	杯	(14.0)	3.0	(9.2)	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	糸切り痕		○			○					良好	にぶい橙色	にぶい橙色	内外面にスス付着
第10図10	P56	3	土器	杯	(12.9)	3.0	9.0	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	糸切り痕	○	○			○					良好	灰黄褐色	灰黄褐色	
第10図11	P56	-	土器	杯	(13.6)	3.4	(9.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り痕		○			○					良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	内外面にスス付着
第10図12	P56	3	土器	杯	13.7	3.7	9.0	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	糸切り痕・板状圧痕		○		○	○					良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
第10図13	P56	-	土器	杯	(13.0)	3.6	(9.0)	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	糸切り痕・板状圧痕		○		○	○					良好	にぶい黄橙色	褐灰色	外面にスス付着
第10図14	P56	3	土器	杯	13.8	3.1	(9.7)	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	糸切り痕・板状圧痕		○			○					良好	灰黄色	灰黄色	
第10図15	P56	-	土器	杯	-	(1.7)	(8.2)	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	糸切り痕		○		○	○					良好	にぶい橙色	にぶい橙色	
第10図16	P56	-	土器	杯	(13.4)	3.5	(8.8)	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	糸切り痕・板状圧痕	○	○			○					良好	浅黄色	浅黄色	底部にモミ痕？
第10図17	P56	3	青磁	碗	-	(3.3)	-	-	-	-										-	青緑色	青緑色	外面に鎬蓮弁文
第10図18	P62	-	土器	杯	13.0	3.1	9.0	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	糸切り痕		○			○					良好	にぶい橙色	にぶい橙色	口縁部にスス付着か？
第10図19	1土	3	土器	杯	13.0	3.2	(9.6)	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	糸切り・板状圧痕		○			○					良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
第10図20	P62	3	瓦	軒丸瓦	(8.5)	(9.6)	2.7		布目痕・コビキ痕											良好	灰色	灰色	
第10図21	一括	3	青磁	碗	-	(4.8)	6.1	-	-	露胎										-	青緑色	青緑色	見込みに鳥文
第10図22	一括	3	青磁	碗	(14.3)	(6.1)	-	-	-	-										-	青緑色	青緑色	
第10図23	一括	3	青磁	碗	-	(5.2)	-	-	-	-										-	青緑色	青緑色	外面に花雲文
第10図24	整地層	3	青磁	蓋	3.6	1.1	5.4	-	-	露胎										-	青白色	青白色	上面に花弁文

①調査区全体写真（南西から）



②掘立柱建物跡発掘状況（南西から）

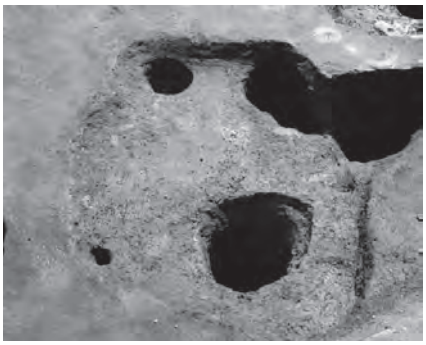
③掘立柱建物跡Ｐ２発掘状況（南から）



④掘立柱建物跡Ｐ３発掘状況（北から）

⑤１号溝状遺構発掘状況（西から）

⑥２号溝状遺構発掘状況（北西から）



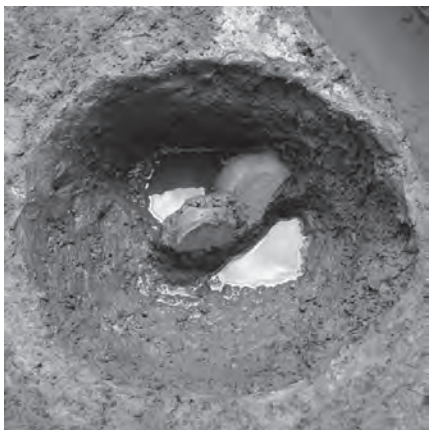
⑦１号土坑完掘状況（北から）

⑧３号土坑完掘状況（北から）

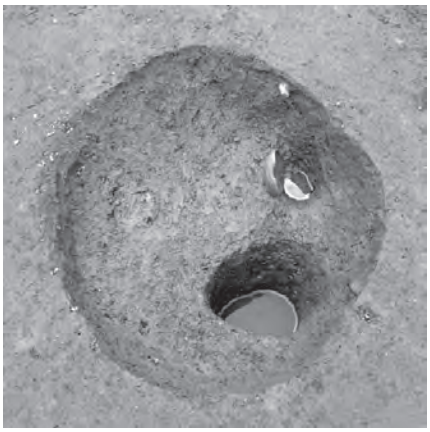
写真図版２

①４号土坑完掘状況（西から）

②４号土坑遺物状況（西から）

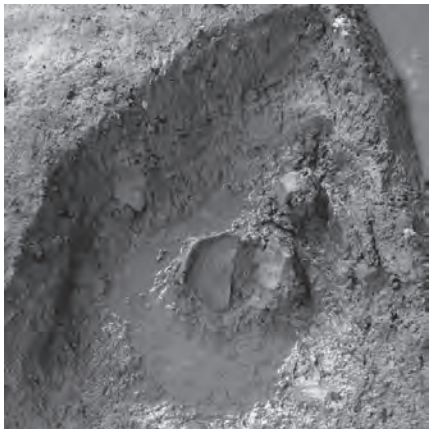


③Ｐ６遺物出土状況（北から）



④Ｐ１３遺物出土状況（北から）

⑤Ｐ１４遺物出土状況（北から）



⑥Ｐ５６遺物出土状況（北から）

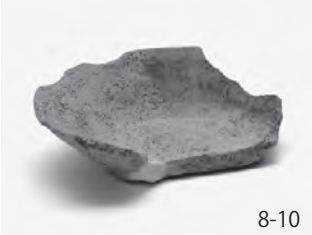
⑦Ｐ５６出土遺物集合写真

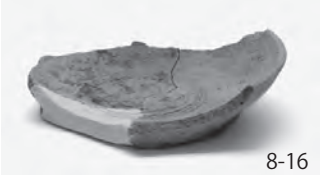
8-1

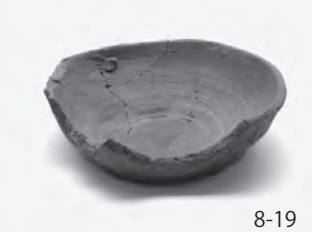
8-2

8-8

8-6

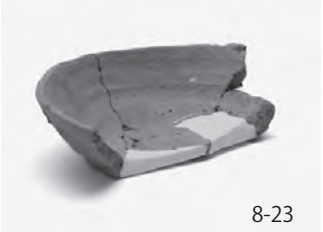

8-10


8-16


8-19

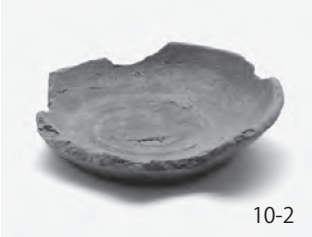
8-20

8-21


8-23

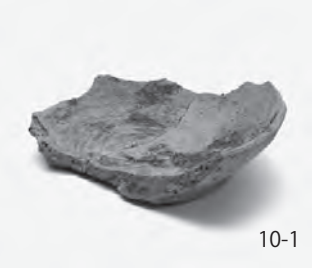
8-25

8-24


10-2

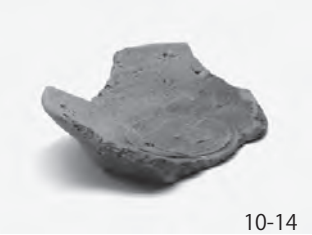
10-3

10-4


10-1

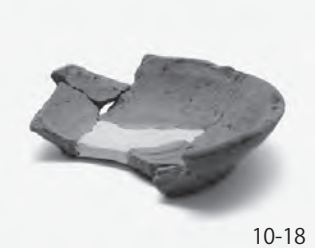
10-10

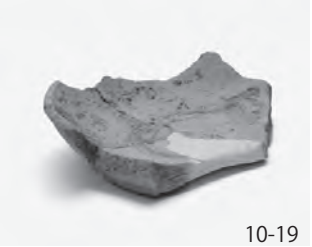
10-12


10-14

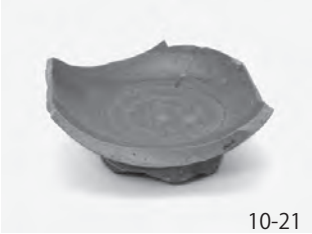
10-5

10-17


10-18


10-19

10-20


10-21

10-22

10-23

10-24

報　告　書　抄　録

ふりがな	じげんざんいせき 10 じ
書名	慈眼山遺跡 10 次
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 113 集
編著者名	若杉竜太・黒沼保子・佐々木由香
編集機関	日田市教育庁文化財保護課
所在地	〒 877-0077　日田市南友田町 516-1　　0973(24)7171
発行年月日	2014 年 3 月 31 日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
慈眼山遺跡（じげんざんいせき）	大分県日田市（おおいたけんひたし） 上城内町（かみじょうないまち）	44204-6	204134	33° 19′ 38″	130° 56′ 36″	20120925 ～1026	78 ㎡	放課後児童クラブ建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
慈眼山遺跡	集落	中世	掘立柱建物跡 1 棟 溝状遺構 2 条 土坑 3 基 ピット多数	土師質土器 青磁・青白磁 瓦	地鎮などの祭祀に利用されたと考えられるピットの検出及びカヤ・クリ等の柱木の発見

要　約	遺跡は日田盆地東部の佐寺原台地東裾から延びる沖積地上にある。調査では 15 世紀後半から 16 世紀前半にかけての集落が確認され、これまでに行われた本遺跡の調査と同様の内容といえる。また、地鎮など祭祀行為が想定される遺構も確認できた。この他、柱穴より出土柱材には、カヤやクリなど多様な木が利用されており、日田での古代から中世における木材の利用傾向と整合することが判明した。

慈眼山遺跡10次

2014年3月31日

編　集　　日田市教育庁文化財保護課
　　〒877-0077　大分県日田市南友田町516-1

発　行　　日田市教育委員会
　　〒877-0023　大分県日田市田島2-6-1

印　刷　　山本印刷有限会社
　　〒877-0059　大分県日田市大日町3986-3

日田市